

入選

テーマ3：多様性を認め合う社会をめざして
「あの日の私へ」

山形県・日本大学山形高等学校2年 鈴木 日優

こんなお姉ちゃんなんか嫌いだ。

そう思うようになったのは、私が中学校に入ったばかりのころだった。一歳上の姉とはけんかもするけれど、小学校までは双子のようにいつも一緒に遊んでいた。ただ一つ違うのは、自閉症という特性を持っていることだ。

私が小学校高学年のころ、支援学級にいる姉のことがきつかけでいじめにあった。当時の私は、なんで支援学級に在籍しているだけだからかわれるのか本当に分からなかった。小さい頃から姉のリハビリに付き添って病院に行っていた私はいろいろな障がいを持っている人たちを見てきた。目の前で奇声をあげる人だったり、ずーっと目の前で私を見てくる人もいた。少し戸惑うことはあっても、これが私にとっては慣れた日常でもあった。小さいながらも「いろんな人がいる」ということを知った。だからこそ、障がいがかきつけでいじめを受けることが理解できず、「姉のことがきつかけでいじめを受けている」なんて親にも相談できず一人苦しんでいた。

中学校へ上がると、姉の学年の人たちからも陰口を言われるようになって。廊下ですれ違つと「ほら、あれ妹だよ、妹も変なんじゃない？」などと指をさされてコソコソ言われることが多くなった。分かっている。姉は何も悪くない。悪くないと頭で分かっている。私に追いつかなかった。姉を責めて自分の気持ちや少しでも楽にしたかったのだと思つた。

思い返せば、私が姉の代わりをしなければならないのではないかと……と無意識に思っていた。誰かに言われたわけではないけれど、私が心の成長を早めることで何かが変わる……そんな気さえしていた。

今となっては心の成長を早める、そんなことは可能なのか？ と疑

問に思ってしまう点もあるが、あの時の私には誰にも相談できず、それがいちばんの解決方法だと思っていた。

だから時間がたつた今でも、どこかで姉を責め続けている部分はあつたのかも知れない。

姉との心の溝は深まるばかりで、この先ずっと続くのかと思つてた矢先、ある子との出会いがあつた。それが、凝り固まっていた私の考え方を変え、姉との心の溝を少しずつ埋めるきっかけになるとは思いもなかった。

高校1年生の夏に医療的ケア児の施設に見学に行った。そこには首に器具をつけている子供たちが元気そうに遊んでいた。無邪気に私のところに来てあいさつしてくれる子までいてうれしくなつた。首に付けているのは何かと施設の方に聞いてみたら「気管カニューレ」という器具だと教えて下さつた。首に穴を開け空気の通り道を作っていると。衝撃だつたのと同時に、かわいそうという気持ちが強く込み上げてきた。そこでハッと気づいた。障がい者だから「かわいそう」だという色眼鏡で見えてしまっていた自分に。きつと最近の私は姉にもそういう目で見えてしまっていたのだろう。障がい者だから一人じゃできない。誰かが手を差し伸べなければならぬ。「普通の人」とは違つたのだと。いちばん姉の近くにいた私が、いつの間にかいちばん残酷な考え方をしていた。「できない」って誰が決めた？

「手を差し伸べなければならぬ」って、なんで義務的な考え方？

障がいがあつてもなくても、挑戦の切符はみんな平等にある。私が色眼鏡を外せば見える世界もきつと変わつてくる。そのことを改めて気づかせてくれた。

姉は今、一般就労に向けて実習を頑張つている。覚えることが苦手だと言つた姉は、小さなメモ帳にびっしり仕事内容を書き込んでいた。輝き方は人それぞれ。姉に対する心の溝は完全に埋まつたわけではないけれど、夢に向かって頑張つている姉の背中が輝いていた。

次は私の番。夢である看護師になって、お互いを認め合えるような世界を私たちの手でつくっていききたい。